

通史：半世紀のあゆみ

青春のパライストラ

第3期黄金時代

編集 部

1. リーグ戦12連覇

第3期黄金時代（12連覇）は、昭和39年の春から、始まったのであった。その3月、この年の主将となる村山栄治と、副将となる藤井敏弘とが、揃って「米国遠征」の代表に選ばれている。その経験が、ここ暫くの低迷を吹き飛ばす原動力になったことは相違ない。そのひとりの村山栄治は夭逝してしまった。彼は、伴義孝が昭和48年に監督に就任すると同時に、コーチに就任している。そして関大レスリング史上「かつてない混迷の時

代・第1次危機の時代」を専心して現役の指導にあたった。学生時代からも、その村山栄治の人柄に惹かれて、「うむ」と唸ったわが仲間たちが大勢いるはずだ。とにかく面倒見のいい人物であった。ここに村山の、コーチとしても、ひとりのOBとしても、レスリングの仲間としても、すべてのレスリング関係者にとって「最後の面談」というべき記録がある。当時の監督の伴義孝が書き留めているものである。

◇

昭和50年の秋季リーグ戦の第2日目、村山コーチが、体の不調をおして応援に来てくれた。このとき、既に2部リーグの優勝の目処はついていて、体調が悪いということでしばらく顔を見せなかった彼を交えて、その日の試合が終わって、堀江前監督、光富前コーチ、藤田コーチ、藤浦コーチと私の5名で会食をした。話はどん底からの盛り上がりをお互いに祝うことにつきた。その席で村山栄治は排尿に障害があるので水分をあまり採れないのだと言っていた。だが、関大レスリング部がどうにか傍目にも形を整えてきたことを祝して乾杯しようということで、1杯だけ呑みほしたのである。翌日、関大が2部で優勝し、その祝賀会を



写真▷「米国遠征」の村山さんと藤井さん
(藤井=左・村山=右)

有志のOBが開いてくれたが、そこには体の不調のため村山の姿がなかった。それから数日して、村山は半年間にもおよぶ闘病生活に入ったのであるが、その間のご両親のなみなみならぬ看病もむなしく、昭和51年5月6日午後3時過ぎに、村山は永眠した。若干33歳であった。寝棺には「レスリング」の書物も収められた。(伴義孝「30周年記念誌」記述より)



その村山栄治が牽引者になって昭和39年の春秋2連勝を果たし、その後の12連勝にも、彼が、かげひなたになって大きく寄与したのであった。第1次危機の時代は「昭和47, 48, 49年」の3年間であった。その時代を村山栄治は献身的に支えてくれた。ここに明記しておく。さて時を経て、平成7, 8, 9年が、部の存続を問うことになる「第2次危機の時代」になるのではあるが、その概要については後述することになろうか。しかしながらこれら2次にわたる「危機の時代」を予期しえた者は、昭和39年時点では、すなわち「12連覇」の出発の時点では、ひとりとして存在しなかったはずである。

2. 昭和40年(1965)・精鋭たちの目標

風俗・流行・歌 スモッグ警報・ジャルパック／エレキ族／♪『柔』

第3期黄金時代が始まった。昭和40年度の精鋭たちの目標は「連勝を続けること」にあった。春季リーグ戦に臨んだ早淵主将、西山副将、今村主務、近藤、松田、丹司、中井の4回生を中心に部員が奮起して完全優勝で3連勝を飾っている。しかし秋には苦しかった。ポイントゲッターがいろいろで負傷していたからである。



毎日新聞社後援西日本学生レスリング秋季リーグ戦は25日から4日間大阪府立体育会館で行われる。来春には広島商大の加盟も予定され、その他2, 3の大学でも同好会をつくるなど発展の機運をみせている。また今秋のリーグ戦から八田日本アマチュアレスリング協会長寄贈の八田杯を再優秀選手に、松井杯が敢闘選手に贈られる。

今春3シーズン連勝、18回目の優勝を果たした関大も秋には苦しいリーグ戦となりそうだ。フェザー級の佐藤を負傷で欠き、ひざの悪い早淵を起用するなど苦しい布陣。ウエルター級の倉橋、長井両新鋭は春より一段と強くなっており完全に戦力になった。だが同大も佐藤の欠けた関大とは5分以上の星勘定がつけられる。丹羽をライトからウエルターにあげこのクラスの2点を確実にあげようというねらい。とにかく同大はこのリーグ戦で優勝しなければ当分優勝できない。主力選手がそろって来春卒業するので今秋にかける意気込みもうかがえよう。

3位の関学はどうか。フェザー級阿部の戦列復帰でぐっと厚みが増し軽、中量級では関大、同大に決してヒケをとらない顔ぶれとなった。38年秋同大初優勝の時と同様三つどもえ戦。三すくみでポイント数で優勝が決まるケースになりかねない。近大は鶴丸、香月といった全日本学生柔道の第一線選手を重量級に申し込んだが出場資格がとれず、エントリーに穴があいたのは気の毒。両選手が出られれば面白い試合になっただろう。

名商大、名城大の名古屋勢も今春新人の活躍で上位校の差をぐっと詰めている。上位3校が優勝争いに目の色を変えていると、この名古屋勢や、桃山大に足元をすくわれることも考えられ、ましてやポイントで優勝を争うような接戦にでもなったりすると、これら下位校との対戦のポイントがものをいうことになる。それだけに上位校も慎重



写真▷「米国遠征」の佐藤さん

に戦う必要がある。ともあれ優勝戦線のあやしい雲行きとともに春活躍した新人群の成長が楽しみだ。(毎日新聞・発行日不詳)



毎日新聞の予想どおり、秋のリーグ戦は、混戦だった。だが渾身の力を振り絞って闘った関大は、4シーズン連続、19回目の優勝を手中にする。故障のハンディーを背負って、優勝を手中にするために、早淵主将は闘った。その栄誉が認められて、この秋から始まった、最優秀選手賞「八田杯」の第1号受賞者に選ばれている。

個人戦では、西日本学生選手権大会で、フリーではライト級の中野1位、ミドル級藤田2位、同好井3位、またこの年から始まったグレコではフライ級松田1位、バンタム級山本1位、同中井2位、同樋口3位、フェザー級佐藤1位、同丹司2位、ライト級中野2位、ウェルター級井加田3位、ミドル級藤田1位、同好井2位と大活躍だった。また全日本学生選手権大会ではグレコのフライ級で山本が2位に入賞している。前年の東京オリンピック大会で、先輩の市口政光が、グレコのバンタム級で堂々の金メダルに輝いたのであったが、その「勢い」に刺激されてますます関大グレコの本領を発揮するようになってきたといえよう。この春3月、佐藤秀夫が、「米国遠征」の代表に選

ばれている。またOBの伴義孝はそのチームのコーチの任を務めることになった。伴は、それを契機にそのまま米国に残留して昭和43年の帰国まで、カリフォルニア州のコーチズ協会やホーソーン市体育局でレクリエーション研究などに従事して研鑽を重ねることになった。

3. 昭和41年(1966)・順調な年

風俗・流行・歌 3C時代・ビートルズ
旋風／ミニスカート／♪『星影のワルツ』

順調な年だった。春のリーグ戦は、「首位不動の関大は相変わらず層の厚さを誇り」(学連の目)としていた。「苦しかった関関戦」(主務の声)を含めて8戦全勝で5連覇20回目の優勝を遂げた。その原動力は、中野主将、佐藤副将、住谷主務、井加田、加藤、山本ら4回生の気迫であった。

秋のリーグ戦は、9大学に膨れ上がり、36試合を3週間合計7日間にわたって消化する強行スケジュールであった。これも勢いによって無難に乗り切った。関大は見事に6シーズン連続、21回目の優勝を、8勝全勝で遂げている。

この年3月18日、アルゼンチン建国50周年記念国際レスリング大会に、佐々木敬監督が、日本代表チームの監督として、また藤田裕充が選手として、10名の団体に遠征の途についた。そのなかには、東京五輪のフライ級の金メダリスト吉田義勝(日大OB)もいる。藤田はこの頃メキシコ五輪の重量級のホープとして期待されている新鋭であった。日本は、世界選手権大会の前哨戦と目されたこの大会で、フリースタイル6階級に優勝し気をはいた。そのうちのひとりとして、ライト・ヘビー級で、藤田も優勝している。そしてチームは、団体優勝をも、ものにしている。

この年の関大勢は大いに活躍している。同じ3月、中野憲一主将が「米国遠征」の代表に選ばれている。同年6月には、先のアルゼンチン遠征の前後にアメリカ・メキシコを転戦して実力をつけていた、藤田裕充が、世界選手権大会（米国・トレード市）の代表に選ばれてグレコのみドル級に出場している。この世界選手権大会には、松井清前監督（OB）が、日本代表チームの団長を務めている。また藤田は、この世界選手権大会の遠征を契機に、彼自身の強化対策のためにも、ユタ州のブリガムヤング大学にレスリング留学して2年間の研鑽を積むことになった。同年11月タイのバンコックで開催されたアジア大会に際して、現地協会の組織委員会のアドバイザーとして、松井清前監督がその大役を引き受けることになった。また10月に山本定夫（コーチ）・山本邦夫（選手）兄弟が日本初の中国遠征に参加している。

国内の個人戦でも、勢いにのって、西日本学生選手権大会において、大量の上位入賞者を出して



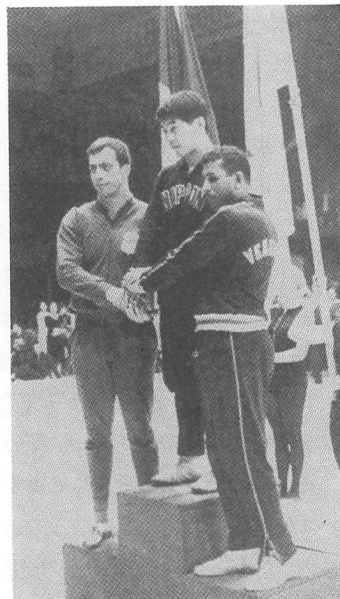
写真▷「米国遠征」選手団（中野さん＝後列左から3人目・後列左端＝米国留学中の伴さん）

いる。フリーではフライ級岡田1位、ライト級中野1位、同長井2位、同大津3位、ミドル級倉橋1位、グレコではフライ級岡田1位、同平池2位、同高祖3位、バンタム級山本2位、同加藤3位、フェザー級佐藤1位、同石井3位、ライト級長井3位、ウェルター級井加田2位、ミドル級倉橋1位と健闘ぶりを大いに示してくれた。



写真▷アルゼンチン建国50周年国際大会「日本代表チーム」
（佐々木さん＝右から4人目・藤田さん＝左から5人目）

写真▷優勝の藤田さん





写真▷「中国遠征」山本定夫さん=後列右から9人目・山本邦夫さん=前列左から4人目

4. 昭和42年（1967）・佐々木監督勇退

風俗・流行・歌 戦無派／ヒッピー族・フーテン族／♪『世界は二人のために』

この年昭和42年度をもって佐々木徹は監督を勇退する。第3期黄金時代（リーグ戦12連勝時代）の中間点を過ぎてその途上の「よき年」にであった。この春も、勇退することになる佐々木監督へのはなむけのために、勝たねばならない。だがチーム力は低下していた。その予想がある。



昨秋、6シーズン連続、21回目の優勝を果たした関大は中野、山本、佐藤という中、軽量級のポイントゲッター3枚を欠いたことが大きい。かつての層の厚さではリーグ1を誇った関大だが、ここ1、2年穴を埋める新人に恵まれず、年々戦力は下降線をたどっている。今年もまた、これといった新人に恵まれない状態だ。岡田を軸に長井、倉橋らがよほどがんばらないと優勝は危ない。



「学連の目」はそう分析していた。事実、春には、関学に1敗を喫してしまっている。それでも

「7勝1敗」の同率で、「関大=66勝点」「関学=65勝点」で、わずかの「1勝点」差で薄氷を踏み抜く思いの優勝をものにしている。これこそは、部員一人ひとりの、すべてが結晶した勝利である。この「年」の率直な感想がある。



現在のレスリング部員は22名でやや少数の感があるが、徹底した精鋭主義をとっている。それによって、精神力を育て上げ、少人数をカバーしている現状である。西日本における実力は、もちろんナンバー・ワン、大学のキャリアが最も長い4年生でさえ、団体戦で負けを知らない強者ぶりである。3年間、つまり6シーズン連続優勝を遂げているわけである。しかしなんといっても、ここで問題になってくるのが、部員数である。現在の強さを維持し、それ以上に延ばすためにも、また、学生生活としての課外体育を有意義に過ごすためにも「同志」すなわち部員を、もう少し増やすことが課題だと思う。この問題は、体育会のほとんど、どのクラブでも抱えている悩みだと思うが、一般学生が体育会活動の認識を再検討すべき時期にきているのではなからうか。毎年毎年何千人という多数の学生が入学してくるにもかかわらず、我が部に入部する者はたった5、6人といういさ

さか情けない現状である。

さて、我々部員の今後の問題点について少し述べることにする。関西勢は関東勢に若干おされざみであるということである。これは実績からして認めざるをえない現状である。そしてこの差を一刻も早く縮めていくこと、すなわち八田イズムでいわく「追いつき、追いこせ」というあの標語を、地で行こうとすることである。西日本で王座を保ちつつけている本学だけにその先導責任を、大いに自覚しているし、またそうしたエリート意識を除外しても、現在の王座に甘んじず、さらに一步、目標を高くもってそれに邁進することが、我々にとって最大の目標だと思うのである。

次に述べることは、希望になってしまうかもしれないが、まず将来、我々レスリング部の専門の道場ができたと思うのである。大学側の予算の都合もあると思うが、過去の実績のある我が部のことなのだから、(道場が)あっても決して不思議ではなく、あまり実績がない大学でさえ所有しているくらいである。8m四方のキャンパスの下に、1枚あたり100キロぐらいはある長いマットを8枚敷くのであるが、練習後、他のクラブに貸してしまわなければならないので、1年生にとっては、ずっと以前から愚痴の種となっている。実際あのマットを並べ、キャンパスを掛け、そのうえを消毒するとたっぷり1時間はかかってしまい、練習後それらを片付ける時間を合わせれば、1時間半もの長時間を無駄にしているように思えて、いつもながら残念で仕方がない。

最後に我が部の部員は悔いのない大学生活をおくっていることを告げておきたい。規律にきびしい体育会において、レスリング部は、自由のもとに規律を重んじている。すなわち、ハードトレーニングによる身体の疲労や、減量による苦しさを、上下の者が身をもって体験しているので、互いに寛容の精神ができあがってきたのかもしれない。

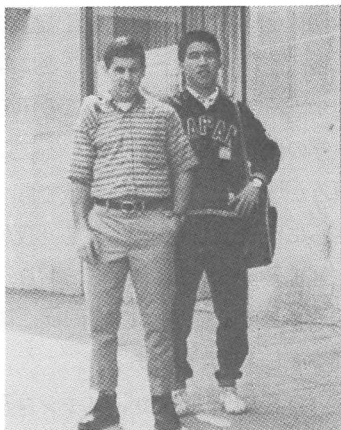
猛練習と規律のもとでレスリング道に邁進する姿は、まさにレスリング家族というにふさわしいものであると思う。だが猛練習のなかにも充分楽しさはあるし、将来もこの楽しさは消えることがないであろう。なぜなら、「苦しさのなかにも、楽しさはある」ということを部員全員が知っているからである。すなわち自由のもとの規律を重んじている我がレスリング部は、喜怒哀楽精神を基調にして、栄光を輝かせた先輩のもとで、規律のもとのレスリング家族を作り上げている。(『関大スポーツ』発刊日不詳)



佐々木監督のみならず、この学生たちの心境に接するならば、確かな手応えを感じ得るだろう。

「レスリング家族」の形成に向けて邁進する。これこそが大学スポーツの神髄である。「勝つ」ことはやはり尊い。しかしそれだけでは駄目だろう。何かが、欠乏している。そこに、「レスリング家族を作り上げる」精神が培養するならば、それだけで、「金メダル」以上の値打ちがある。学生スポーツの自覚と、評価は、まさにそこになければならない。第3期黄金時代の間接点にある、我が関大レスラーたちは、その神髄を、日々のレスリング三昧の生活をとおして己のものにしているのだ。佐々木監督は、その学生の頼もしさを、感じとって、これでもう安心できる、役割を果たすことができた、と悟ったのではなかったか。勇退には、動機が必要だろう。もちろん私的な動機もある。しかし、指導している「学生」のこの頼もしさは、大いなる動機になるはずだ。

この春岡田雅勝主将が「米国遠征」の代表になっている。春のリーグ戦では、この年の1月に改正となった、「新ルール」が適用されることになっている。岡田の米国遠征はその新ルールの先取り勉強としても役立っている。この頃の関大は、あらゆる面で、総合戦力を発揮して「連覇」に向け



写真▷「米国遠征」の岡田さん(右)

て、部員一人ひとりが自覚している。そして春も苦戦ながら連覇したのだが、秋には8戦全勝でさらに記録を延ばすことになった。この秋、従来の「11人制」から「9人制」へとリーグ戦の試合方式が変わった。前出『関大スポーツ』記事にもあるとおり、部員減の関大レスリング部にとっては、この「9人制」が有利に働いたことも事実である。だが、なににもまして原動力となったことは、「レスリング家族」精神にほかならない。

部員不足でチーム力は低下していたもののリーグ戦連勝の「年頭の誓い」はどうにか果たすことができた。一方個人戦では底力を発揮して、引き続き、好成績を上げている。西日本学生選手権大会では、フリーで、フライ級平池1位、バンタム級岡田1位、同西野3位、フェザー級石井1位、ライト級長井1位、ウェルター級倉橋1位である。また全日本学生選手権大会ではグレコのライト級で長井が3位に入賞している。この年、さらに指導面では、西脇義隆コーチがソ連遠征チームのコーチとしてその任を果たしている。

「30周年記念誌」の「カイザー関大」と題する佐々木敏の一文には、その冒頭において、「私が在任中のあゆみを綴ることは大変な誇りでありますことを皆様に感謝しております。また西脇義隆

コーチをはじめ指導陣に加わっていただいた諸氏のご尽力があってこそ、この大任を無事に果たし遂げることができたものと感謝いたしております」と、同氏ならではの謙虚な筆致が印象深い。佐々木監督の勇退にともなって、次期監督には、堀江茂雄が就任することになる。

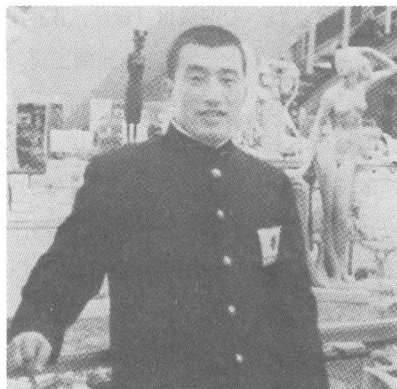
5. 昭和43年(1968)・堀江監督発進

風俗・流行・歌 イザナギ景気・昭和元
禄／言葉「五月病」／♪『恋の季節』

堀江茂雄は、佐々木監督の「8連勝」を引き受けて、監督に就任することになった。ところが大学スポーツにも変化のかげりが見えはじめていた。昭和43年には、「全共闘」が結成され、従来の学生運動の在り方と趣を異にして、戦闘的な様相をあらわにしていたのである。学生気質も大きく変容しようとしていた。堀江茂雄新監督が「30周年記念誌」に書いている。



社会(特に政治が)とスポーツが表裏一体をな



写真▷「米国遠征」の倉橋さん

していることは自明の理です。私が就任しました昭和43年頃は、池田首相時代の神武景気による高度経済成長期から、安定期に入り国民もようやく戦争の惨禍を忘却し、世の中に新しい秩序が生まれ、生活にある程度の余裕ができた時期でした。

このような社会の趨勢のもとにスポーツマンシップにも微妙な変化が生じました。この時代以前の運動選手は、社会の軋轢に抗して、全人格を投入し、何事にも馬鹿になって打ち込む人が多勢をしめました。それに対して、当世の彼らは、人生をより有意義にしようと、スポーツを活用する気風になってきたようです。

戦後に生まれ窮乏を知らない選手の人生観、価値観は、そこから何かを掴み取ろうとするより、体力面における健康増進という面を重視する傾向に変わりつつありました。(堀江)

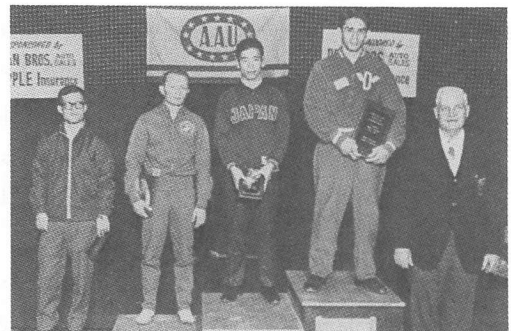


指導陣が変わった。佐々木監督、西脇コーチから、堀江監督、神谷・光富・伴コーチへと。社会様相は克明に変わりつつあった。特に学生の気質は一変した。いわゆる大学紛争の時代に突入しつつあったのである。この年昭和43年は、有力選手を前年に引き続き卒業で送り出し、近大、関学、同大の充実ぶりは著しく、「関大危うし」の前評判ではあった。

春のリーグ戦への抱負は「優勝、関西学生のレベルアップがモットーである。倉橋主将、阿部(グレコ・フライ級2位)を全米選手権に送り、長井副将のハードトレーニングのもとに、その目的達成に余念がない」と格調も高い。この抱負を意気込みとして、主将倉橋、長井副将、笹井副将、村上主務を核にして全員が劣勢をはねのけるべく必勝の信念に燃えて励んだ。幸いなことに、全階級に、平均したメンバーを揃えることができた有利性を発して、それに春合宿の猛練習が結実して、難局を突破して9連勝をものにすることができ

た。第3期黄金時代を引き継ぐ堀江監督の門出であった。堀江監督をサポートすることになった伴義孝は、米国留学から帰国して、この年の4月から関西大学の体育助手に就任している。これで指導陣に厚みが増した。秋季リーグ戦でも、春の9連勝をさらに自覚して、その抱負を「我が部は10シーズン連続優勝のために練習しており、そして必ず実現する」ことに定めて、春同様に精進の結果の連覇を成し遂げたのである。

この年、OBの市口政光が、メキシコ五輪のグレコローマンのコーチとして活躍し、グレコで金メダル1、銀メダル1のメダリスト2名を生み出す指導力を発揮している。



写真▷「全米選手権」2位の阿部さん

6. 昭和44年(1969)・最後の優勝

風俗・流行・歌 東大安田講堂落城する
／言葉「断絶の時代」／♪『いい湯だな』

第3期黄金時代はこの年をもって終わる。それは同時に、関西大学レスリング部が、一部リーグで優勝する機会を、平成9年11月24日に「関西大学レスリング部創部50周年記念式典」が開催されるまでに至るまでも、「1度」も迎えることので

きないことをも意味している。関大は氷河期ともいえる辛い「試練の時代」を迎えることになったのである。「30周年記念誌」の「昭和44年」の項は「この年はさらに絶対絶命のピンチだった」と書き出している。その原因は、全国的な大学紛争の影響を受けて「体育推薦」問題が攻撃材料のやり玉となり、関大でも漸減的にその制度が消滅しつつあったことと、学園と学生間にはびこってしまった暗い空気にあった。関大でのそれを一口に表現すれば「部員激減」現象にほかならない。

この年、近大と関学が本命視されていた。近大は木野と大治を、関学は笹尾、菅沼、高崎、中島らを、それぞれ強力なポイントゲッターとして抱えていたからである。それに引き換えて関大は昨年度と同様にポイントゲッターを多く卒業させてしまっていた。関大の強みは、ただひとつ、「関大の4年生は頼りになる」にあった。この「4年生が強くなる」の関大伝統は、すべての「黄金時代」を含めて、関西大学レスリング部50年史を一貫して流れる特長である。「氷河期」の平成現在にあっても、この原理は的確に作動していて、その伝統は受け継がれている。この年、その「4回生原理」が働いた。

北川主将、平池副将に服部主務、阿部、西岡、井宮の4回生がとにかく頑張っってその「自覚」をいかんなく発揮してくれることになる。そして春季リーグ戦は、同率優勝ながらも、連覇を達成したのである。その春の関大レスリング部を評して、外部の声は、「練習熱心、OBの力が大きい。やはり王者のチームだ」と絶賛している。秋季リーグ戦までには、3回生以下も着実に台頭してきたし、伝統の底力を出して、4回生の確実性が一段と増して、堂々の5戦全勝で「12連覇」を成し遂げたのである。「通算27回目」「第3期黄金時代」を象徴する12連覇。見事な闘いぶりだった。当時の2回生森本和博が語る「わがレスリング部に

ついて」の記録がある。



まず最初に、わが部の全容を紹介したいと思います。年に10日間の強化合宿が春と夏にあり、西日本リーグ戦の前には1週間ほどの合宿があります。昨年入部して、驚いたことに、何と規律正しいことか。高校時代に、大学生の概念というもの一般的に見て「たるんでいる」という感をもっていた。それゆえに一層その規律さというものが私の心に映ったのです。

練習においての諸先輩方の、われわれを思いやるあまりのシッタバトウ！、何度逃げだそうと思ったかしれません。しかし練習後の解放感、精神的充実是他の一般学生には味わえない、われわれ唯一のものだと思います。先輩方も、練習のときには鬼のように厳しくなりますが、練習を終えるとくだらない冗談などもとばせて、われわれ下級生を喜ばせてくれます。

われわれが最も力を入れる試合は、やはりリーグ戦です。昨年の秋季リーグ戦で、みごと10連勝をなしとげました。実力は他の大学と互角だと言われましたが、優勝したのは、やはり、わがレスリング部の伝統と良き先輩方の指導の賜物だと思います。リーグ戦間近になりますと、道場では、異様なほどに熱気立ち、いかに選手各人が真剣になって練習しているかがよくわかります。わが部は特にグレコに優秀な選手が多く、この間の全日本レスリング選手権大会においても、今春卒業した倉橋主将、長井副将、そして平池現副将がそれぞれ「3位・2位・3位」と立派な成績を残されました。

こういう先輩方を見て、私も早く強くなって先輩方のようになりたいと思い、奮起して練習している昨今です。練習内容は、日によって多少違いますが、だいたい1日3時間ほどで、多いときには4時間にもわたることがあります。その間、ス

パーリングとトレーニングをやりますが、トレーニングでは足を使う補強が多く、足腰が弱い私にとって苦しいことばかりの連続です。腕力をつけるトレーニングでは、綱昇りとバーベル、鉄棒を使っての懸垂運動などです。しかし減量の苦しさ、練習の苦しさ、勝利の喜び、敗北の悲しみ、これこそ、われら若者独特の特権だと思います。これから、わが関大レスリング部は、日本に、いや世界に羽ばたく荒鷲のごとく、飛び回る存在になることを希望して一生懸命練習に励みたいと思います。(森本和博「30周年記念誌」エッセイ)



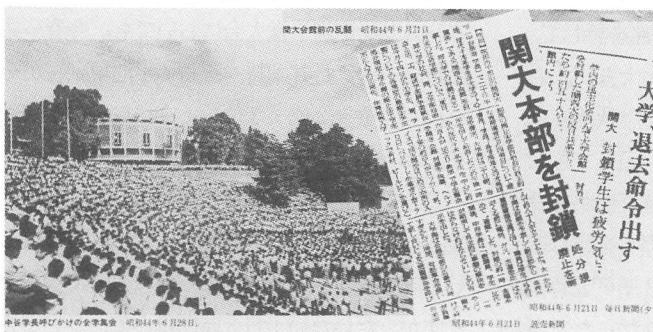
森本和博は現在警察官として日本の「規律」を守ることに専念している。この一文は、当時の、日本レスリング協会の機関誌『JAWF』に大学紹介として寄せられたものである。2年生の森本の観察のとおり、「伝統」の底力がもたらした「春秋」の勝利だった。昭和43年に監督に就任した堀江茂雄も、「前年に引き続きこの4シーズンほど伝統の力と選手の執念に感動し、精神一到何事か成らざらん、ということが肝に応えたことはありません」と、「30周年記念誌」で、告白している。秋の祝勝会でのビールは旨かった。コーチの伴義孝が指導陣を代表して1年間の禁酒を誓っていた。堀江監督と指導陣は、そうした些事をも含めて、「執念の雰囲気づくり」という戦略を綿密に

立てていたのである。綿密さが要求されたのは、学内が「大学紛争風」で騒然としていたからだ。

- ▷ 1月 学生約30名が社会学部学舎を封鎖。
- ▷ 6月 大学立法法案反対、学生規定廃止等
いわゆる5項目容認を迫る第1部学生 250名
が関大会館を封鎖、以後学園内に紛争拡大、
10月上旬まで休業(10月11日授業再開)。

紛争風が荒れるなか、5月10日に始まって6月1日まで続いた春季リーグ戦の期間は、「体育館」の使用を禁止される始末であった。その間近隣の「道場」を借りての出稽古頼みである。北川主将が同志社香里高校の出身ということで、その道場の便宜を図ってもらうなどの苦勞が続くことになる。さらに6月から本格的な「学校閉鎖」が始まってしまった。この年1月、東京大学は、「44年度入試」を中止することを決めている。全国的な大学紛争のこの激化現象は、関大においても、すべての予断を許さない。関大は大阪万博粉砕を叫ぶ活動家の拠点校になっていたのである。とにかく緊迫していた。「連覇」は、守らなければならない。だが練習場にもこと欠く状態である。学生も指導陣も苦悩した。打開策の討議会場は堀江監督の自宅である。そこでさまざまな戦略を練った。そしてどうにか勝ち取った「12連勝」だった。その祝杯のとき、堀江監督の目には、涙があった。

(完)



写真▷ 中谷学長呼びかけの全学集会・昭和44年6月28日

本学では、昭和44年5月ごろから、大学立法反対で学内が騒然となり、6月には「全共闘」が結成され、5項目要求をしかけて大衆団交を要求。大学当局がこれを拒否するや、同20日、関大会館を封鎖した。(『関西大学百年のあゆみ』より)